

米国のスクールサイコロジスト

ニューヨーク州認定スクールサイコロジスト バーンズ亀山静子

The Role of the School Psychologists in the United States

Barnes, Shizuko Kameyama

こんにちは。おはようございます。日本はもう31日になってハロウィーンの日だと思いますので、私もこんなふうにはイヤリングを着けてみました。ジャック・オー・ランタンになっているんですけども。スクールサイコロジストというのは、子どもたちと直接接することが多いので、とくに学校に行きますので、こういう小道具も用意しないとイケないんですね。今日はそのスクールサイコロジストについてお話しさせていただきます。私の授業をとった方は、そこは聞いたことがあると思うこともあるかもしれませんが、復習だと思ってお聞きいただければと思います。

アメリカのスクールサイコロジストということで、その国、国によってスクールサイコロジストといっても違いはあるかもしれませんが。日本の場合は、スクールサイコロジストと言わないで、スクールカウンセラーという職業があると思うのですが。アメリカでは学校の中に、メンタルヘルスに関わる職種の人が、大きく分けて3種類います。一つはスクールサイコロジスト。それから一つは、この東海岸のほうではガイダンスカウンセラーと呼ぶことが多いのですが、西の方では日本と同じようにスクールカウンセラーと呼んでいるようです。それから、もう1種類がスクールソーシャルワーカー

というのが配備されていることもあります。その三つの職種、どの人もカウンセリングをしたり、親や子どもや先生と協働して仕事をするわけですけども、一つのすみ分けとしては、スクールサイコロジストは、アセスメントすること、特別支援教育に非常に深く関わること、ということが大きな特色だといえると思います。

本日の流れ

- スクールサイコロジストとは
- スクールサイコロジストの仕事
- パンデミックの例
- スクールサイコロジストに求められる知識・スキル
- 日本を考えた時に

本日の流れは、スクールサイコロジストとはということ、スクールサイコロジストの仕事について。それから、パンデミックでどんなことがあったことがあったかということについて。そして、スクールサイコロジストに求められる知識やスキルにはどんなことがあるのかということ。あと日本を考えたときに、こういうところのポイントを強化していく必要があるのではないかというところを、少しお話しさせていただきますと思います。

1) スクールサイコロジストとは

スクールサイコロジストとは	
・乳幼児から就学年齢の子どもに特化した心理士	
専門分野	発達、学習、学校適応、行動マネジメントなど
対象	子ども、保護者、教師、学校組織
資格認定	州による認定 (NASP認定の全米資格もある)
主な仕事	心理教育的アセスメント、コンサルテーション、介入支援、心理教育、危機管理、研修など
職場	学校、幼稚園、特別支援学校など (特別支援教育の対象になる児童生徒のいる公立学校区には必ず配置)

まず、スクールサイコロジストというのは、乳幼児から就学年齢、大きくて、ずっと行って大学生ぐらいまでですかね、おもには乳幼児から高校を卒業するぐらいまでの子どもに特化して心理士です。専門分野はそういう年齢が対象なので、発達とか学習とか学校適応だとかです。それから、行動に関してのいろいろな問題についていろいろコンサルテーションすることも多く、行動マネジメントなどもしています。そして、対象はもちろん子どもなんですけれども、その子どもをめぐって保護者とか教師とか、それから学校組織全体とかにも及び、そのほかに管理職にも話をしたり、コンサルテーションしたりします。

おもに資格は、州による認定になっています。だいたい資格は学校に関してだけでなく、お医者さんとか、このあと話してくださる森先生のクリニカルサイコロジストの資格も、そういったものすべてライセンスというものに関しては、教育局が認定をしているんですね。そして、日本の臨床心理士でいえば臨床心理士認定協会というのがあるのでしょうか、臨床心理士を認定する協会があって、そこが協会認定というのをやっていたと思うんですが、公認心理師ができる前はそういうことをだっただと思うんですが、そのようなかたちのNASPという全米スクールサイコロジスト協会による全米資格というものもあります。おそらくこれはいろいろな州に

よって違いがあるので、それを一つの一貫したクオリティーをキープするためということも、理由の一つにあるでしょう。もう一つは、スクールサイコロジストというのが学校に関係しているの、その人の滞在資格なども関係してくるんですね。外国人はなりにくい仕組みになっています。以前は、よい国民を育てるには、よい国民が育てる必要があるという米国市民でなくてはいけないというしぼりがありました。そういうことがあると外国人だとなれない。クリニカルサイコロジストだとなれたのですけれども、スクールサイコロジストはなれないというようなこともありました。そうありながらも、いろいろな文化的な背景や、英語以外の言語が話せるスクールサイコロジストが必要だということもあって、それで全米資格も必要だという声があがったのではないかなというふうに私は思っています。おもには、州による認定で資格をとって仕事をします。

主な仕事としては、心理教育的アセスメントというのが、州によっては、あるいはその学校区によってはほとんどそれしかしていないぐらいのところも、昔はありました。今はいろいろ教育の仕方も変わってきたことによって、少なくなってきたはいますけれども、それでもちょっと前の統計ですけれども、全米のスクールサイコロジストが過ごす仕事内容の半分以上はアセスメントだという数字が出ているほど、アセスメントが大きくあります。それから、コンサルテーション。実際の介入支援。サイコロジストの場合は、カウンセリングですとか、スキルトレーニングみたいなこともします。それから、心理教育をしたり、危機管理のチームに入っている危機に対応する。介入支援のところ、もちろん危機介入も入るわけですが。そういったことと、あとは教職員対象の研修な

ども行います。

職場は、学校、幼稚園、特別支援学校、場合によっては、教育委員会の中に入ってやることもありますし、大学なんかでもそういう人がいる場合もあります。それから何らかの形で就学年齢の子どもを対象にしたデイトリートメントの施設ですとか病院などにもいます。あとは、矯正施設というか、法を犯してしまった子どもがいるところで働くこともあります。それから、個人開業している人もいます。公立の学校であれば、特別支援教育の対象になる児童生徒が一人でもいれば、スクールサイコロジストを配置しなければならないという決まりがあります。特別支援教育の対象の子どもは1割前後いますので、どこの学校区においても一人はスクールサイコロジストがいることになっています。各学校に一人ずつ常勤でいるというわけではないんですけども、もちろんそういう学校もありますし、そうでない学校もありますが、少なくとも学校区には一人は配置されることになっています。

2) スクールサイコロジストの仕事

スクールサイコロジストの仕事

- アセスメント
- 子どもへの直接的支援
- コンサルテーション
- 全校レベルの実践やポリシーに関して管理職と協働
- 地域コミュニティの専門職との連携

<https://www.nasponline.org/about-school-psychology/who-are-school-psychologists>

スクールサイコロジストの仕事は、今申し上げましたけれども、アセスメント、子どもへの直接的支援、コンサルテーション。全校レベルでの実践、学校あげて何々をするっていうのがあります。それから、ポリシーに関してのことを管理職といろいろコラボレーションしながら

見直しをしたり、新しいことを考えたりするというのも関わっていきます。それから、地域コミュニティにいる専門職との連携というのもしていきます。学校に来ている子どもたちは、地域の相談機関だとか、お医者さんだとか、なんらかのそういったサービスを使っていることもありますので、そういったところとの連携が非常に大事です。それから、学校のほうから、「個人的にこういうところに相談に行ったり、トレーニングを受けるといいですね」と紹介することができますので、どんなリソースがどれだけあるかというのを知っていることは大事になっていきます。

3) スクールサイコロジストの仕事の目指すもの

スクールサイコロジストの仕事の目指すもの

- 学力向上
- ポジティブな行動やメンタルヘルスの促進
- 多様な学習者の支援
- 安全でポジティブな学校風土の促進
- 家庭-学校間のパートナーシップを強化
- 全校レベルのアセスメントとアカウンタビリティの向上
- 個々の児童生徒の学力と行動の伸びのモニタリング

<https://www.nasponline.org/about-school-psychology/who-are-school-psychologists>

学校に関係するサイコロジストであるわけですから、当然学習ということを見捨てるわけにはいかないですね。無視するわけにはいかないというか、昔は勉強か、それとも心の余裕かみたいな、日本でもそういうところがありましたよね。学習のことを厳しくやっているとゆとりがなくなって、ゆとりがないと子どもたちがきゅうきゅうとしてしまうと、ゆとりの時間をつくってカリキュラムも少し軽くすると、今度は学力が落ちるみたいところで、天秤のようにあっちが重くなったりこっちが重くなったりというようなこと、アメリカでも繰り返してきました。しかしその中で、両方が大事なんだ。両方がそれぞれを補っていく、あるいはそれぞれ

それを相互に高め合っていくものなのだということが研究でも立証されてきました。学校というところは学力を身につけるために来ているので、学力において伸びていくということを、どの子においても軽く見てはいけない、それは情緒的な適応にも関連するからということです。おまえはいいよ、野球がうまいんだから、野球だけやっていたらいいなかなかたちです。ではなくて、どの子も学力で伸びていけるように、それをサポートしていくということを、大きく私たちは意識している必要があるんですね。それからもちろんポジティブな行動とか、ポジティブなメンタルヘルスを促進していくということもとても大事です。それから、多様な学習者の支援、学習者の中にはいろいろなニーズがあったり、いろいろな学習の仕方があったりします。アメリカなんかは移民の国ですから、いろいろな言語を話す家庭から来ている子どももいます。この学校すごく大変なんですよっていうのを、この学校に来ている子どもたちのバックグラウンドの言語を数えると50何カ国語あります、といったことでよく表わします。日本でも経済的に大変な家庭が多いということ、どのぐらい給食費免除の子どもがいますということ、そういうこと、もちろん使うんですけれども、バックグラウンドの多様性を言語の数で表わしたりします。それから、学び方というのも多様です。この多様性の中には、特別支援教育的な、障害ですとか、障害があるための学び方の違いとか、そういったものも含めますが、多様な学習者がいて、その多様な学習者のそれぞれを支援していくことを目指していかなければいけません。多様な学習者の中の大多数を救いましたというかたちではなくて、すべての子どもたちがいろいろな支援を受けながら学習を向上させ

ていけるような、それを直接的、間接的にサポートしていくというのが、スクールサイコロジストの仕事です。

それから、安全でポジティブな学校風土の促進ということで、すごく成績がよくても、学校が殺伐としているようではいけないし、学校に来るといことが、学校に来たらほっとできる、ここでは大丈夫なんだと安心できる、そんな学校。そして安全であるということが、肌身をもって感じられる。そして、心の中でも感じられる、そういった学校風土の促進をしていきます。

それはどういうことかという、もしいじめなんかがあれば、安全ではないですよ。いじめられるかもしれないと思う、それだけでもドキドキして、学習にも身が入らなくなるということがありますから、そういったこと、必ずしも学校の外で爆弾が爆発するかもしれないという、そういう意味での安全、もちろんそれも大事なんですけれども、そういうことだけではなく、自分は安心していただけるという学校風土をつくるということは非常に大事です。それにも、力を入れています。

それから、家庭と学校とのパートナーシップを強化していくということも、スクールサイコロジストはしていきます。もちろん担任の先生それぞれが、各家庭と連絡をとったり、学校と家庭の間にはいろいろなリエゾンといいますか、間に立つ人がいるわけですけれども、そこを特にお子さんの学力向上だとか、学び方の違いだとかいうことを学校と家庭が話すときに、しっかりとパートナーシップを持って強化していかないとはいけません。それから、たとえば行動問題がある場合なんかも、おたくの子こんなふうが悪いんです、注意してくださいというかたちではなく、どうしてこのような行動になってしまうか、あるいは、そういう行動が起こって

しまう学校の中に何か原因がないか、そしてそれをこのように変えていきたいということを家庭と話したり、家庭にも協力を得て、問題が減少するように努めていきます。

それから、全校レベルのアセスメントとアカウンタビリティの向上ということで、みんなの学習だとか、あるいはポジティブな行動だとか、どのように変わって行っているかということのアセスメントしたり、それからそれに対してアカウンタビリティが求められるわけです。その説明がきちんとできるように、こんなことがあって、こんなことをしたらこのように学校が変わっていきまして、と説明できる必要があります。それにもスクールサイコロジストが関わります。

それから、個々の児童生徒の学力と行動の伸びというのが必要なので、それが伸びているかどうかのモニタリングというのもスクールサイコロジストは関わっています。

4) コンサルテーション

コンサルテーション	
「間接的サービス」・・・教師や保護者の問題解決の支援を通じて「子ども」を支援するモデル	
<ul style="list-style-type: none"> ・個別の児童生徒（障害の有無に関わらない） ・特定のグループ、学級全体 ・学校組織 	問題解決のプロセス <ol style="list-style-type: none"> ①問題特定 ②問題の分析とプラン作成 ③プランの実施 ④プランの評価

実際にいろんなことをやっていくわけですが、そのいくつかを取り上げてお話させていただきたいと思います。

コンサルテーションというのは、非常に大きな部分で、先程、アセスメントが50%ぐらいと言いましたが、コンサルテーションというのも非常に大きなものを占めています。つまり、まず最初に先生が、うちのクラスの何々ちゃん

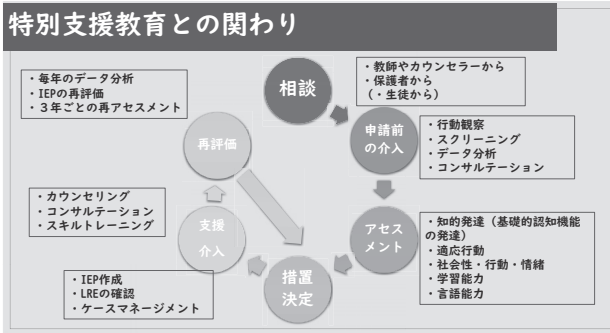
がちょっと心配なんだけれどって言ってきたり、それから親御さんが実際にうちの子のことなんですけれどと相談してくることがありますよね。そのときに、先生方や親御さんの言っていることを聞きながら、問題解決を、じゃあその問題に関して一緒に解決していきましょうと支援していくわけですね。そこでは親御さんと教師の問題解決の支援をするんですけれども、スクールサイコロジストとしての最終的なゴールは子どもなんです。だから、その子どもが力を発揮できるように、子どもがハッピーになれるようにということを支援するために、教師や保護者の問題解決を支援するわけなのです。こういうのを間接的なサービスと呼んでいます。

間接的なサービスをする子どもに関しては、個別の児童生徒なんですけれども、それは必ずしも障害があるとかないとかに関わらず、またその話を持ってこられたときに障害があるかどうかというのはわからないわけですから、誰のことにしても相談にのるわけです。それから、間接的なサービスで、ある特定のグループがこのようなよねという相談にも関わりますし、何年何組の学級がちょっとわさわさしちゃっているのよねという話があるときにも相談にのります。学校組織全体に関しても相談にのることももちろんあります。

問題解決はそのように、持ち込まれた問題に対して、話を聞きながら、問題の特定をしていきます。それから、問題自体を実際に分析します。分析をする段階では教室の中に観察しに行ったり、それまでの記録を読んだり、そういったこともしてデータを分析し、じゃあこんなふうに見てみましょうというプランを作成します。そして、プランを実施してもらって、実施の間も観察に行ければ観察しに行ったりし

て、その後どのように変わったかプランの評価をしていくわけです。

5) 特別支援教育との関わり



これでこう話をしているうちに、もしかしたらこの子の問題点に関しては、何らかの特別支援教育の対象になるのかもしれないというふうに思うこともあるわけですね。この図をご覧ください。特別支援教育の関わりとしての相談は、まず、相談が来ます。場合によっては、高学年の子、あるいは中学高校になったら、もしかしたら生徒のほうから言ってくるかもしれませんね。その受けた相談を今のようなコンサルテーションをしながら問題解決という、要するに申請前、つまりアセスメントをしましょうという正式な申請をする前に介入をしてみます。コンサルテーションをして、さっきのように問題解決をトライしてみる、あるいはデータ分析をしてみる、あるいはちょっとしたスクリーニング、大きなアセスメントではないけれどもちょっとしたスクリーニングをしてみる、行動観察をしてみる、というようなことをしていくわけです。コンサルテーションをして先ほどの問題解決を試みたけれども、変わらなかったということもあるでしょう。そしたら、もう少し詳しく調べてみましょうとか、あるいは、もちろん方法を変えましょうということもあるかもしれませんが、そういったことしながら、やはり特別支援教育のなんらかの支援を受けら

れるともっといいかもしれないということが、そこに浮上してきた場合は、実際に正式申請をしてアセスメントを行います。アセスメント自体は、知的発達、知能検査と言ったりもしますが、要するに基礎的な認知機能の発達を見ていくということですね。一般的には WISC が、アメリカでは WISC-V が2014年に出ていますので、もう6年ほど使っている。来年あたりに日本では出るのかな。WISC-V を使うことが圧倒的に多いですね。

それから、適応行動を、もし知的な遅れが疑われる場合は適応行動も、主に Vineland を使うことが多いと思いますけれども、日本でも出てますよね、Vineland を使って適応行動を調べたり、社会性とか行動とか情緒とか、そういった面もアセスメントしていきます。それから、やはりそれが大きく学習に関わってきている場合、たとえば、成績がすごくよくないんですとか、読みですごく苦勞しているとか、なんらかの教科ですごく苦勞しているということがあれば、学習能力も見ていかなければいけません。ただ単純に算数とか国語とかというかたちで調べるのではなくて、読みなら読みの中で、デコーディング部分、要するに文字を解読するという部分と、もっと高次の読解ですとか、それから流暢性も調べて、どういうところにつまずきがあるか見つける作業をします。算数でも同じようにしていくわけですが、その一つ一つを見ていきます。アセスメントをするとよくてこぼこという話をすると思うんですけども、たいていの人ではこぼこがあってフラットな人っていうのは少ない。それぞれそれなりにこぼこがあるわけですが、すごく成績が上がらない、学業的にすごく苦勞しているという場合には、とくに LD、学習障害をアセスメントする場合には、知能検査と学力検査の差を

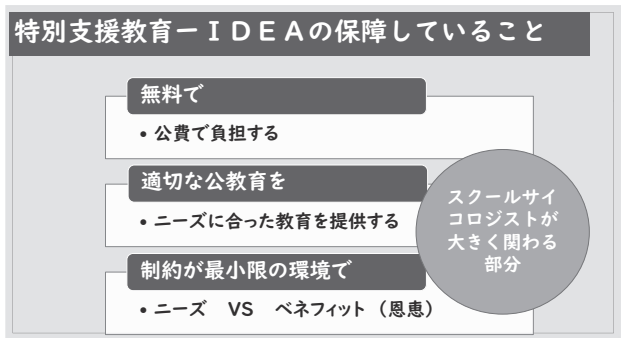
見るだけだと、知能検査が実際よりも低くなってきてしまっている、基礎的認知機能の部分も知能検査に反映されて、全体のいわゆるIQというものが下がってしまうので、そこに大きな差が出てこなかったりする。そのために、LDじゃないですねって言われることもあるんですね。ですから、それよりも一つ一つの基礎的認知機能、たとえば、流動性推理とか、ワーキングメモリーだとか、視覚空間だとか、そういう基礎的認知機能での落ち込みと、それが表現されているかたちとしての学習能力での力にも落ち込みがあるという共通点があるかどうかも見えていくことになっていきます。ですから大雑把に、国語とか算数とかいうかたちではなくて、聞き取りをしているときに、国語であまりうまくいかない、どういうところでつまづくという話があるでしょうから、それと実際の学力を見た検査と、基礎的な認知機能との関わり合いがあるようであれば、LDですねっていうことも言えるので、そういったことを詳しく見ていきます。アメリカではテストがすごくたくさん出版されているので、あれもこれもとこちらの興味でやっていると何日も何日もかかるようなテストになってしまう。子どもの負担の軽減のためにも最低限の検査の数で最大限のデータをとるというのが我々に課されています。

そのアセスメントの結果を受けてですね、措置の決定をします。実際に特別支援教育を受給する資格がこの結果から出ているかどうかを検討して、それに対してどんな学級措置がいいのか、どういう支援サービスが必要なのかというようなことも、特別支援教育委員会で決定します。スクールサイコロジストはその中の重要な一メンバーです。そのときにIEP、日本の個別指導計画に似ているものなんです、IEPの作成にも関わったり、それから実際に決めた措置

が、たとえば、制約が一番小さくて、限りなくそのお子さんが普通のまったく何にもしていない状態に近い状態かどうかということを確認していき、ケースマネジメントもしていきます。

実際に支援介入になると、特別支援の専門の先生が、特別支援的な指導はしますし、スピーチセラピストがスピーチセラピーをすることもあります。スクールサイコロジストで言えば、カウンセリング、コンサルテーション、スキルトレーニングということをやっていきます。カウンセリングとかスキルトレーニングは直接子どもにしていきますけれども、コンサルテーションは間接サービスとして、教師や親御さんにしていくというかたちになってきます。

そして、またそれは支援をしていて、毎年データ分析をして、この子に決められた今のプログラム自体が適切かどうか評価をしますし、また3年ごとに大きくもう一度アセスメントが行われます。再評価までいくと、措置決定と回っていきます。このどの過程にもスクールサイコロジストは大きく関わっていくことになります。



実際にちょっと先ほど申し上げた話なんです、アメリカでは特別支援教育については、IDEAという法律でいろいろ規定がされています。全障害者教育法という法律なんけれども、1975年にその前身の法律ができました。そこで、そのときから三つのことを大きく保障している

んですね。つまり無料で、適切な公教育を、制約が最小限の環境で行いますということを保証しています。無料と言っても、この世の中にただのものはないわけで、そうしたサービスが無料で受けられるというのは、公費で負担しているわけですね。公費というのはみなさんの税金で負担しているわけです。ここが一つのポイントなんですね。そして適切な公教育を保証している。適切というためには、ニーズに合った教育を提供するということですよね。シンデレラのガラスの靴がすごくステキだと思っても、ぴったりでなければ履けないわけで、義理のお姉さんたちは履けなかったわけですね。同じようにぴったりとしているということが必要なわけで、ぴったりとしたということが保障されるためには、ニーズもしっかりとアセスメントしなければなりません。この適切な公教育をといるところに、アセスメントも無料で全部無料で提供しますよ、ということが含まれているわけです。

そして、制約が最小限の環境で、というふうに言っていますけれども、ここの二つの「適切な公教育を」というところと「制約が最小限の環境で」というところに、スクールサイコロジストが大きく関わっています。



「制約」というところが、ちょっとわかりづらいと思うんです。ここの表をお見せします。この左側のピンクの部分というのが、通常教育

の部分なんですね。制約が一番小さい状態が、通常の教室で、通常の指導で、何にも特別なことがされていない状態のことを言います。

私は近眼なんですけれども、近眼で黒板が見えないから前の席にしてほしい、ということがあったとします。私の子どもの頃は、今でもあるかもしれませんが、席替えをするのにくじ引きでしたりすることがありました。そういうときに、一番前の席に座らなければならない私は、席替えのみんなでするくじ引きに入れられないわけですね。くじ引きを引いてしまって、一番うしろの席になったら困るから。そういったことが制約の一つなんですね。

アメリカには日本からたくさん企業の駐在員が来られ、その方々がお子さんを帯同してきて、そのお子さんがアメリカの現地校に入りますけれども、そのときに英語がわからないとします。そうするとアメリカでは移民が多いので、その移民してきた人たちになるべく早く英語を身に付けてもらって授業についてきてもらえるようになってほしいということで、英語の強化訓練をしていくんですね。それも、多少の制約になるわけです。それがこの「補強指導」というところに入るわけです。そういったことを、通常の教育の範疇内でも随分やっています。

教室の中に教員が入り込んできて指導をするということは、日本でもやっていると思います。「通級指導」というのも日本でもやっていますよね。「統合チーム指導」というのは、日本にはない方法かもしれません。TTなんですけれども、一人が特別支援教育の専門の教師、もう一人が通常教育の専門の教師で、二人担任制で障害認定をされてサービスを受ける必要のある子と、定型発達してきている子どもたちを1つの学級に入れて指導します。障害認定されている子は12人を超えない範疇で、12人以下、そ

して40%までというかたちで。ニューヨーク市なんかはお金がないですから、特に先生が2人いるならば人数を増やせということになるので、30名までをキャップにして入れています。

それから、「支援学級」「支援学校」というのは、みなさんもおなじみだと思います。この青い部分はすでに特別支援教育の範疇内になっていますが、実際に見た目は通常の教室の中に在籍しながら、すでにそういった指導を受けられるというのが、上の「通常の教室」というので表しています。このようなスペクトラムがあって、右に行けば行くほど、制約が大きくなるんです。私たちは、特別な指導が必要な子がいるとついついこれがあるといいよね、そしたらこれもあるといいよね、とサービス精神のつもりで、てんこ盛りにいろいろなサポートを考えがちなんですね。でもそういうことをすることによって、お子さんを不必要に隔離してしまうことにもなりかねないんです。

先ほどの《特別支援教育—IDEAの保障していること》のスライドに戻りますけれども、制約が最小限の環境でっていうのは、ニーズには応えるけれども、それ以上にあれもあるといいよね、これもあるといいよね、というかたちのことはしません、ということをここでうたっているんです。てんこ盛りにしちゃうのを少なくすると、何かけちのようなのですけれども、そうではなくて先ほど申し上げましたように、不必要な隔離を防ぐためにそれをします。

それからもう一つは、先ほど申し上げた、公費で負担するという部分なんですね。税金でまかなっているの、納税者に説明責任があるわけなんです。なので、納税者に対して、この子はこういうニーズがあって、それに対して私たちは応えるために、こういった費用を使いましたというのを説明できるかたちになっていなければ

いけない。すなわち、ニーズには応えるけれども、それ以上のことをしていたら説明が成立しない。これも重要です。スクールサイコロジストとしては、ニーズにこたえているか、しかし、不必要な隔離にならないかということをしかりと監視していきます。

6) 子どもへの直接的支援介入

子どもへの直接的支援介入

- カウンセリング
 - ① 定期的カウンセリング（特別支援教育…個別・小集団）
 - ② 特定のグループへのカウンセリング（離婚家庭等）
 - ③ 危機介入
- スキル・トレーニング（特別支援教育…個別・小集団）

子どもへの直接的支援介入と先ほど申し上げましたが、スクールサイコロジストは、カウンセリングをすることもあります。定期的なカウンセリングは、先ほどのIEPに特別支援教育が認定されたときに、その子の措置を決めて、その支援サービスのサポートの一環としてカウンセリングが必要となれば行ないます。たいだい週に1回ぐらいが通常です。特別支援教育の一つのサービスとして行います。それは個別であることもありますし、小集団でやることもあります。

それから特別支援教育以外に、特定のグループへのカウンセリングということも行うこともあります。たとえば、離婚家庭の子どものグループカウンセリングみたいなものを週1回ぐらい、お弁当の時間に「自分のお弁当持っておいで」と、そのサイコロジストの部屋でやったりします。これはスクールサイコロジストに限らず、ソーシャルワーカーがやったりガイダンスカウンセラーがやったりすることも、もちろんあります。

それから、危機介入。何か危機が起こった場合には、それに対して介入して、話すことはもちろんやっていきます。スキル・トレーニング、これもたとえば、特別支援教育の一環として、行動上の問題があったり、自閉症スペクトラムのお子さんなんかだと、いわゆる普通の教室に入っていったりするソーシャルスキルトレーニングみたいなものよりも、もっと特化したソーシャルスキルトレーニングが必要なわけで、それを小さな集団で行ったり、あるいは個別に行ったり、あるいは、実行機能が弱い子に、その実行機能に関してのトレーニングをするというようなこともしていきます。また最近では特別支援教育でなくともこのようなトレーニングを提供しています。

7) 予防的心理教育

子どもへの予防的心理教育

心理教育

- ソーシャルスキルトレーニング
- ストレスコーピング
- レジリエンススキル など

全校規模のプログラム運営

- いじめ予防プログラム
- ポジティブな行動介入支援 (PBIS) など

子どもへの予防的心理教育なんかもちろん行っています。教室に入って行って、ほかの先生と一緒にいろんなことをやっていくこともありますし、スクールサイコロジストがその時間を使ってやっていくこともあります。いろいろなテーマでやっていきますけれども、ソーシャルスキルトレーニングとか、ストレスコーピング、レジリエンススキルなんか、一番一般的だと思います。

それから、全校規模のプログラム運営っていうのにも関わります。いじめ予防プログラムですとか、PBISは最近日本でも言われてきてい

ると思いますけれども、ポジティブな行動介入支援という、一つのシステムになっていて、これは導入している学校が非常に多くなっています。

PBISには機能的行動分析なんかも入ってくるので、サイコロジストがかなり、先生方のトレーニングの中心的な役割をしていくことになっていきます。

8) 管理職や学校組織への支援

管理職や学校組織へのコンサルテーション

危機介入チームの重要メンバー

- プランニングから関わる
- 外部との連携

教職員のメンタルヘルス

それから、管理職や学校組織へのコンサルテーションも行います。危機介入チームの重要メンバーです。日本でも管理職とか養護教員とか、いろんな人が入っていくと思うのですが、そのチームの重要メンバーですし、プランニングから関わって、毎年それを見直すことをしますし、外部との連携というのも重要な役割です。それから、私も大学院のコースにいたときに、よく言われたのが、その学校の中で唯一のスクールサイコロジストということもよくあるだろうと、特に小学校なんかではあると思うと。そのときに教職員のメンタルヘルスにも気をつかっていく人にならないといけないよ、とすごく言われました。教職員のメンタルヘルスというものに対しても、注意を払っていくこともスクールサイコロジストの仕事です。

9) 研修

研修	
保護者	教職員
<ul style="list-style-type: none"> ◦親子間のコミュニケーション ◦家庭学習支援 ◦ティーンとの関わり ◦発達段階に応じた支援 ◦実行機能 ◦テスト ◦ストレスコーピング 等 	<ul style="list-style-type: none"> ◦教室での介入の方法 ◦障害や合理的配慮について ◦指導と学習の効果との関連 ◦実行機能 ◦保護者とのコミュニケーション ◦ストレスコーピング 等

保護者を対象としたワークショップなんかも行いますが、教職員に対して教室内で先生がこういうふうになればもっとうまくいくのと思うことが多々あるわけですから、その介入の方法に関しての研修もします。それから、障害や合理的配慮についての研修は、教職員によくします。実際の指導の方法と、学習の効果との関連ということに関して、学習科学の側面から説明したり、実行機能ですとか、保護者とのコミュニケーションのとり方に関しての研修もやっていきます。ストレスを抱えている子どもは多いので、ストレスコーピングに関してはよく研修をすることもあります。

10) パンデミック下のニューヨーク

ニューヨークの状況

- 3月初めにNY最初のケース・・・あっという間に感染拡大
- 3月半ばには学校校舎の閉鎖、授業はオンラインへ
- 3月22日州全体がロックダウン
- 検査率、感染率、濃厚接触者の追跡、病院の空きベッド数など1週間の平均で、赤、オレンジ、黄色のゾーン（郵便番号ごと）
- 国内でも38の州から来た人は自主隔離

https://forward.ny.gov/covid-19-regional-metrics-dashboard

ここで少しパンデミック関連のことを話したいと思います。日本でも大変でしたけれど、ニューヨークは日本とは桁違いに感染者数も多く、随分日本から「大丈夫？ ニューヨークにいて」というようなご連絡もいただきました。私は実際には1月の半ばから2月の10日ぐらい

までだったかな、日本にいたんですね。その頃ちょうど日本ではクルーズ船の問題が起きてきて、ああ、なんか流行ってきたなっていう感じがあり、電車の中のみなさんの様子も変わってきたりしていました。それでも私がニューヨークに戻ったときは、まだまだ極東の話という感じだったんですね。それが徐々に西海岸のほうでケースが出てきてみんなそちらの方を向いていたら後ろからやってきたという感じなんですね。ヨーロッパ経由でやってきたことから、あっという間に感染が拡大して、2月の末から3月はじめに最初のケースが出て、あっという間に拡大したので、3月半ばまでにもう学校は校舎は閉鎖して、授業はオンラインにシフトしました。3月22日に州全体のロックダウンというかたちになりました。全体がロックダウンになって、学校も校舎が閉鎖されて、授業がオンラインになったので、実はこの3月以降からですね、3月の末、4月にかけて、州のテストというのをニューヨークでは行っているんですけどもその州のテストが、一切中止になりました。

パンデミックが学校にもたらしたもの

- 3月半ばから学年末までオンライン授業
- 学年末のアセスメント（州の学力テスト、高校卒業資格認定テスト等）の中止
- 9月の新学期からは、二択（完全オンラインか、ブレンデッド）で開始

<ul style="list-style-type: none"> 子どもの学習に関して保護者の理解が進んだ（親子の時間の回復） テクノロジー能力の伸び 新たな学習の在り方の発見 新たな指導の在り方の発見 	<ul style="list-style-type: none"> 友だちに会えない（つながりの希薄化） 試験・評価の中止 教師のデジタル能力による差 オンライン疲れ やる気の低下・鬱の増加 親子喧嘩の増加
---	--

ニューヨークでは高校卒業資格認定、どこの州もそうなのですが、高校卒業資格認定のテストというのをやるんですね。ただ科目の授業を受けていればいいのではなくて、その教科を、たとえば生物なら生物の授業を受けた、もちろんその間には中間テストとか期末テストとか学校内のテストはあるんですけど、最後の仕上

げに州の資格認定のテスト、単位認定のテストというのを受けて、それで合格しないと単位を認めてもらえないんですね。それが一切受けられないということになったんです。中止になってしまったので。それから、州の学力検査というのも毎年やっているんですけども、それも全部中止になりました。日本で言ったらセンター試験というんですか、それに当たるSATという試験が年に何回か行われて、何回でも受けられるのですけれども、それもずっと3月からピタッと止まってしまったために、受験生たちがすごく大変だったんです。ずっとSATが中止になって、9月になってやっと再開したときに、もういっぱいどこも申し込んでも入れないんですね。私の知り合いの人は、ノースキャロライナ州だったら受けられるところがあるというのを見つけて。遠いんですけど、そこに受けに行ったら、帰ってきたときに州の規程で自粛のために2週間学校を休まなければならないとか、いろいろ難しいことがあって大騒ぎしていました。テストがなくなったので学年末の成績がつけられないとか、授業自体をどうしたらいいのか、というような騒ぎもありました。しかし、オンライン授業になるということの問題は、日本ほど大変ではなかったですね。もともとテクノロジーを非常に入れていて、中学や高校は教室の中でもクロームブックなどを使って、必要な子には学校が貸与するというかたちでデバイスを貸したりしていました。教室の中でも、先生が説明して、そのあとで、「じゃあ、課題に関しては、Google クラウドに入っているから」と言って、そこでコンピューターを開いて子どもたちが始めるというような授業は多かったものですから、中学高校はわりとスムーズに、「課題が増えたな」とか文句すら言っていましたが、割とスムーズに行き

ました。ただ、小学校低学年なんかは結構苦勞してましたが、先生は非常にクリエイティブにやっていました。そのようにオンラインで授業をするということは、わりとスムーズにいったと思います。9月の新学期からは二択、完全のオンラインか、ブレンデッドと言って週に2回とか3回とか学校に行き、あとはオンラインで学習するというようなかたちで開始をしているところがほとんどです。またそこで感染者が出ると、ちょっと学校が休みになったりしながらも、そのように続けていっています。

友だちに会えないということが子どもたちには一番大きくて、部活もない、スポーツできない、お稽古ごとにも行けない、中高生なんかはそれでも自分でスマホを持っていたりしているのでSNSでいろいろ関係を保ったりしてましたけど、小さい子はもう本当に友だちに会えないというので大変だったり、今言ったように試験や評価の中止の影響もありました。先生方のデジタル能力によって授業の面白さがすごく変わってしまうこともありました。今は長いことオンラインでやっているんで、子どもたちもかなりオンライン疲れが出てきていて、やる気の低下とか、うつ病の増加も報告されていますし、親子も四六時中顔を合わせていないといけなかったので、親子喧嘩が増したというようなこともありました。しかし、マイナス面だけでなく、子どもの学習に関して保護者が今まで学校に行って見るわけではなかったんで、このようにやっていたのかというのがわかったり、理解が進んだというのがあります。

ごはんを今まで一緒に食べるのが、子どもも親も忙しくて、今までほとんどなかったけれども、そういう時間がとれたとか、親子の時間の回復に関しては、みなさんよかったですおっしゃっていましたね。今まで子どもも親も忙し

すぎ。また子どもの忙しさに、親が送り迎えしなければいけないので、すごく大変だったので、いつかポーズボタンみたいなものがほしいと思っていたが、やっと今まで夢見た時間が得られたというふうに喜んでいたりしていました。それから、オンラインでやるのがすごい大変だと、親御さんたちは最初すごく文句を言っていたんですね。でもテクノロジー能力が、子どもも親も伸びましたと喜んでいらした方もいる。先生方も同じだと思います。

私自身も本当に、今まで Zoom は使っていたけど、3月までは自分がホストをすることはほとんどなかったのが、今はホストすることもでき、いろんな芸当もできるようになったので、私のテクノロジー能力もすごく上がったなと思います。

それから大きく私が指摘したいことは、ニューヨーク市ではオンライン授業が始まったらずい Zoom 爆弾があったために、Zoom でのリアルタイムの授業というのをやめちゃったんですね。ニューヨーク市がやめたら、他のところも影響されてやめたりして、Google ミートで朝の会みたいなものを作って、「じゃあ、今日の課題はこれ」と説明して、あとは「先生いるからね、質問があったら来てちょうだい」というかたちでそれぞれが課題に向かうということが、小学校でも結構行われていたんです。これじゃあすごい大変って親御さんが言っていたんですけど、実はその課題を、課題であれば、どの科目から始めてもどの課題から始めても、自由なわけですよ。自分が時間をかけたい課題に時間をかけるということもできるわけですよ。そのように自分で決めて、自分の好きな順番で、自分の好きなペースで、自分の好きな時間帯にやってよいということがあると、こんなにも勉強しやすいんだということを見つけた

子たちも結構いるわけです。そうすると自分で調整することによる学習っていうのは、非常にやりやすい。先生にリードされて、「はい、書きましたか?」「書き終わった?」「はい、次ね」というような、そのペースまで決められてしまっって一斉にやっていくのと違うということがわかって、その発見ができた人はすごくうまくいきました。それから先生方も新たな指導のあり方というのを発見して、子どもにまかせていいところがこんなにもあったんだということがわかり、その意味ではものすごくプラスだったと思うんですね。それぞれが学んで、それぞれが学びで伸びを示していくというためには、そういうことが今まで自分でリードして、自分で子どもたちのペースを決めなければいけないだと思っていた先生方には、とっても新しい発見であり、それが効果的であることが発見できて、これはよかったと思うんです。

スクールサイコロジストはその間、授業もないし、遊んでいたのかというと、まったくそうではなくて、今までどおりのカウンセリングや、スキルトレーニングというのは、オンラインでやっていました。もちろんほかの特別支援教育サービスも、スピーチセラピーなんかもオンラインでやっていましたし、依然として IEP に関しての会議はオンラインで続けていました。それから、オンラインに関して、オンライン疲れは生徒だけではなく先生にもあります。親御さんから、こういうのが大変、ああいうのが大変っていうような相談が入ってくれば、それに対しての対応をするということもしました。

私どもの、これから話す森先生と私は、ニューヨーク日本人教育審議会というところの教育相談室でカウンセリングもしているんですけども、そこで主催して、日本語を話す親御さんたちを対象に、親御さん対象のワークショップを

いくつももってきましたが、そういったことも現地校でもやっていました。

そういった何かがあると、それに対しての対応というのもスクールサイコロジストはしていなければならないと思います。

今後の学校 今後の学び方

- ・学習者が自分で学びやすさを見つけて学ぶ。
- ・指導者はゴールを見据えて、学習者がそのゴールを達成できるように支援することが「指導」の本質になる。
- ・「柔軟性」「クリエイティビティ」「新ノーマル」

これに対応できるように支援

9) 日本のスクールカウンセラーに求められること

NASP (全米スクールサイコロジスト協会) が求めているスクールサイコロジストに必要な知識というのは、こんなにいろんなことがあるんです。

NASPの求める必要な知識・スキル

- | | |
|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ◦ データ収集・分析 ◦ アセスメント ◦ プログ्रेसモニタリング ◦ 全校レベルの学習を促進する実践 ◦ レジリエンスとリスク要因 ◦ コンサルテーションと協働 ◦ 学習に関する介入方法 ◦ メンタルヘルスに関する介入方法 ◦ 行動に関する介入方法 | <ul style="list-style-type: none"> ◦ 指導支援 ◦ 予防と介入サービス ◦ 特別支援教育サービス ◦ 危機への準備、対応、回復 ◦ 家庭-学校-コミュニティの協働 ◦ 発達や学習の多様性 ◦ リサーチやプログラムの評価 ◦ 専門職としての倫理、学校法、学校システム |
|---|--|

<https://www.nasponline.org/about-school-psychology/who-are-school-psychologists>

この中で特に私が日本を考えたときに、スクールサイコロジストに求められることというか、スクールサイコロジストの仕事を担当している人に求められることっていうのは、こんなことがあると思うんですね。

日本を考えた時に スクールサイコロジストに求められること

- アセスメント能力
 - 適切な検査ツールを選び、支援に繋がるアセスメントを実施する。
 - 観察方法、データ収集・分析方法にも精通する。
- 特別支援教育に関する知識・情報
 - 障害に関する知識・情報のアップデート
 - 子どもに保障された権利や関連法律に関する知識・情報のアップデート
- 学習に関する知識・情報の充実とアップデート
 - 学習科学に精通し、効果的な介入方法や指導法に関する知識・情報をアップデートする。

まず、アセスメント能力で、適切な検査ツールを選んで、支援につながるアセスメントができるということ。いつも、支援につながるということを念頭においたアセスメントをしないと、ただ数値を弾き出す、知能テストもいろいろあって手が8本ぐらいほしいなと思うような検査ツールもありますけれども、そういうのを使いこなしてスコアを出して、スコアを計算してIQに変えるという作業であれば、中学生の賢い子にも教えたらできると思うんですね。そうではなくて、いかにここでこの子の支援につながるデータを集められるかというのがポイントだし、そしてそれを分析して支援につなげていく、その子の発達や学習につなげていける、それを念頭においたアセスメントを実施することが大事です。なので、観察方法、データ収集、分析方法にも精通することがすごく大事だと思うんですね。ただただ、一つの検査ツールを使って、それだけでおしまいにするのではなくて、いろいろな検査のデータと親御さんや先生から聞いた話を含めたデータをつなげて考え、分析することができるということが必要だと思います。

特別支援教育に関する知識と情報というのは、すごく大切です。障害に関する知識や情報のアップデートを常にしておくということと、子どもに保障された権利や関連法律に関する知識や情報のアップデートもすごく必要で

す。まだ学校現場では合理的配慮の理解が非常に遅れているので、そのところに子どもに保障された権利はこういうことなんですと説明できることが必要です。とくに公立の学校では、合理的配慮を提供しなければいけない義務があります。なので、その提供義務を怠ってしまうことになりませんよ、ということをお知らせすることも大事です。そのことに関してよく、スクールカウンセラーなりスクールサイコロジストが知っておく必要がありますね。

それから学習に関しての知識と情報の充実とアップデート。学習科学に関して、心理学を専攻した人間だからこそ学んでいるので、それを実際の指導法や介入方法につなげて説明をする、こういうふうにするとなぜうまくいくのか。先生方の中にはそれもわかってらっしゃる方もいれば、そうではなくて「いやこういう子にはこうすればいいんですよ」、「ずっとそうでした」、「そうすればうまくいくんです」と経験からおっしゃる方もいる。それがなぜうまくいっているのかということの説明をこちらが提供できれば、先生方はご自分の経験と、教えるノウハウをしっかりとわかってらっしゃるので、「じゃあそれならこういうこともしてみようまくいくかも」ということに発展していきます。そのような情報提供は必要だと思います。それができるようにこちらでも知識と情報をアップデートしていく必要がありますね。

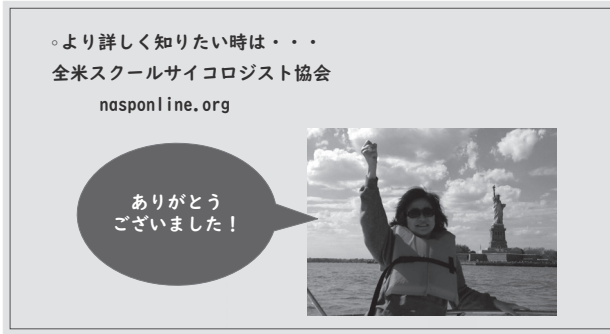
それから、日本を考えた時に、協働能力、保護者とか教師とか、管理職とか、さまざまな専門職と協働していく必要が、それができる必要がありますね。個室でクライアントと対峙するだけではないわけです。

また、行動とか予防プログラムの知識と情報というのを知っておく必要もあると思います。いじめ防止だとか、いろいろなプログラムがありますが、それに関してもよく知っておく必要がありますし。それから、学校が直面する問題や取り巻く環境、社会で起きていることへの感度を上げておいて、学校のニーズアセスメントをして、必要な介入をする。それから、社会問題に関して、情報をアップデートして対応するということをします。

今回、パンデミック中に黒人の男性が白人の警察官に首を締められて、亡くなるという事件が起こり、BLACK LIVES MATTER という運動が非常に大きなうねりをもって、全米に広がりました。今年の夏休み中、教師たちがどんなことを研修のテーマとしてやってきたかということ、ジャスティスということなんです。正義をどのように子どもたちに教えるかということです。研修の案内とかが来ると、それが大きくとらえられていて、みなさんやっぱり学校でどのように子どもたちに対峙していけるのか、自分たちの今までの行動というのはどうだったかということを見直し、正しく教えるということに力を入れていました。そういうことも非常に大事で、スクールサイコロジストも、あるいはスクールカウンセラーも、そういうことをしっかりとアップデートしておく必要があると思います。

**日本を考えた時に
スクールサイコロジストに求められること**

- 協働能力
- 保護者、教師、管理職、様々な専門職と協働する。(場合によってはその集団でのグループダイナミクスも考慮)
- 行動・予防プログラムなどの知識・情報の充実とアップデート
- 学校のニーズに応じた問題行動やいじめなどの予防プログラムに関しての知識・情報をアップデートし、運営する。
- 学校の直面する問題や取り巻く社会で起きていることへの感度
- 学校のニーズアセスメントをし、必要な介入をする。
- 社会問題に関して、情報をアップデートし、対応する。



急いで話をさせていただきましたが、より詳しく知りたい場合は、全米スクールサイコロジスト協会のウェブサイトがここにあり、そこにアクセスしてみてください。ありがとうございました。

《質疑応答》

フロア：アセスメントのフィードバックという点で、いわゆる診断のようなことは可能ですか？

バーンズ先生：そうですね、学校現場では特別支援教育を提供するというのと、いわゆる医療的な診断をすることは別と考えています。学校での適応を支援するために特別支援教育は必要ですね、あるいはそうじゃないですね、というタイプの結論をアセスメント結果としてお伝えする。それから、特別支援教育を受けるためには、キンダーガーデンという5歳児以上の場合、13カテゴリーある中のどれにあたるかということ、区分をする必要があるんですけども、それをお伝えすることになります。それが必ずしもお医者さんに行って受けてきた診断と同じでないことがあります。たとえば、ADHDの場合だと、医師からADHDの診断を受けてきても必ずしも特別支援教育の対象になるわけではないのです。おそらく、たとえば、ADHDでコンサータなどの薬を処方され、服用していて、行動の面でかなり落ち着いてい

ば、あとは合理的配慮によって、時間延長ですとか、モーターニーズに応えるという意味で多少動いてもいいとか、そういった合理的配慮を提供することで十分に対応できると考えています。ADHDで特別支援教育の対象になっているとすると、その他に大きな問題があるとか、学習障害が併発しているお子さんも多いので、学習障害で特別支援教育の対象になることはあります。自閉症と診断を受けてきたとしても、自閉症で、知的に高く、学習上も十分にやりこなせているお子さんだと、必ずしも自閉症というカテゴリーに入るのではなく、言語的な問題があるお子さん、コミュニケーションに問題があるお子さんという区分に入るということがあります。診断という言い方ではなく、そういったカテゴリーに入るかというかたちで、学校でのアセスメントでは言うようにはしていません。ただ、報告書ではその子の検査結果やデータにもとづいて具体的な問題を分析していますので、それを使い、サービスを始めるということになっています。

それから、スクールサイコロジストも相手も子どもであっても守秘義務はもちろんあります。ただ、当然担任に話したり、この人に話したほうがいいということに関しては、それをなるべく話しましょう、なぜいいのかという理由を説明して、納得してもらって、場合によっては、話す場に同席したりして話したりすることが私は多いですね。